

吉村文男著『ヤスパース 人間存在の哲学』を読んで

日 下 耕 三
Kusaka Kozo

はじめに

在るものが、なくなり、いたものが、いなくなる。日常、自分のまわりのあるものは、あることに何の疑問ももたない。しかし或る特殊な状況におかれ、一度すべてのものがなくなることに気づいたとき、そして、それは他ならぬ自分の存在も例外でないと思いついた時、その思いにどのように対処すべきであろうか。存在の不思議さ、非存在への恐れ、そのように意識する人間存在とは。

本書は2011年3月上梓された。脱稿は2010年11月で『平城京遷都1300年で賑わう奈良の寓居にて』とあとがきにある。続いて震災直後に、本書の著者吉村教授の退官記念講演があった。この時学長は冒頭の挨拶の中で、アカデミックという言葉と科学技術に触れられた。

本書に「ここでは・・・合理的な知が支配する・・・技術的な生存・生活秩序と大衆が一体であること、・・・技術が生み出した大衆の支配する現代にあっては、人間は超越的なものとの関わりを失って信仰を喪失し、そのことにおいて同時に自らが何者でもないもの、価値なきものとなった」(p 51f)とある。著者は、この自然科学の加速度的発展を見た今日の状況を切り開いてゆくことのできる何かが、かれヤスパースにはあるという。

振り返り、教科教育の前に礼拝をもって一日を始める中高教育を考えてみる⁽¹⁾。

1. 一社会科・公民科教員の思い出

本書との出会いに至る思い出と本書の印象を語ることをお許しいただきたい。

社会科教員として、初めて教壇に立った日より、授業をどう始めるか、わかる喜びにどう導くかを考え続けたように思う。「人間は知ること欲する」というのが私の体験的信念だからである。同時にそれは、「学ぶとはまねること」であり、授業の進め方については、自分が受けた授業とその授業計画の推測にとどまらず、恩師である先生方の方法を真似その教育観を探るものともなった。

人は何を見る（見ない）か、何を聞く（聞かない）か、何に触れ（触れない）か、何を嗅ぐ（嗅がない）か、何を味わう（味わわない）かの毎日で形成されると思う⁽²⁾。なによりも体験が大切であるというのが私の考えである。

幼稚園からそれぞれの発達段階に応じた体験学習がなされたことと、何より、子供であった自分を人格と認めて接して下さった先生方の思い出には感謝のほかない。仰げば尊し。威厳とやさしさがすべての恩師にあった。尊敬の思いで一杯である。

また当時は地域の教育力ともいえるべきものが確実に機能していたように思う。近所のおばさんはいつも身近に見守っていて、声をかけ、励まし、時には叱ってくれた。近所のおじさんたちは、夏の夕涼みの時に戦争体験を聞か

せてくれた。今はなきその方々や、近所の友人・知人そして家族に胸が熱くなる。

子どもにとって学ぶ・まねる大人が、近くにいる体験、すなわちよい教育環境条件は、戦後の高度経済成長からバブル崩壊という環境変化の中で確実に失われてきたが、当地では、皮肉にも阪神・淡路大震災直後にそれが再現された。子どもたちは、これまで以上に親の背中を見ることになったのである。

祭りや宗教行事は五感を通して感得する生成消滅の世界を超えた世界を意識させようとするものであって、この教育の必要性を本書から強く感じると同時に、このもっとも大事な文化の継承が、戦時中の子どもの一部にはできなかったのではないかと思った。大勢の大人が身近からいなくなった（ほとんどは男性）、この教育の空白の影響はどのようなものか。そんな実証的研究には興味があるが、牽強付会になるおそれがあり難しい。

先祖や眼に見えぬ存在に感謝し手を合せる等、人間としての畏敬の感情を育むためには、特に真似やすい子どものときに学び体験しなければならない。このような子どもの時の体験が欠如すると、大人になり、年齢が進んだからといって自然に身につくものではない。「人間は教育され。教育する動物である」といわれるとおりである。

教師になってすぐ、一口に「知る」と言っても、その種類と段階がいくつもあることがわかった⁽³⁾。さらに学年ごとにある、いわゆる教育目標を生徒個人人の理解度や関心にどう応え実現するかについては、教科教育を越えて教育対象の人間（子ども）観と教育制度と切り離せないものと考え始めていた。

教育制度ということでは、1980年代後半に見直されたという幼稚園のカリキュラムの影響を知りたいし、時間空間をもっと広げるなら、指導者となるべきエリート教育といわれる旧制高校のそれを知りたい。また、手元に『英国における大学と職業教育』という発表論文がたまたまあるが、諸外国の制度との比較検討も参考にはなるはずだと漠然と考えていた。

少し話はそれるが、台湾本省人の老人から、流暢な日本語で感謝されたことがある。それは教育行政の問題として2000mを越える所にまで、日本人は先生を派遣して教育し教育の大切さを教えてくれたということであった。その結果が今の台湾には高校まで義務教育として残り、日本が作って残してくれた産業基盤とともに今日の台湾繁栄の基礎になっているとのことであった。しかしそれを聞いた私の思いは複雑であった。それは以前、純粋な教育愛を持って海を渡った当の日本人教師の悔悟の姿を知っていたからである。

教育に話を戻すと、プラトンの国家篇の理想国家論にあるように、教師は教師の役割に徹して、校長から委嘱されたクラス管理と授業にチームワークで専心すべきと思う。国家の指導者はその資質と能力を備え全体を統括する者であるが、その将来の支配者・権力者を指導するのも教師である。エリート教育が必要な所以であり政府が変わっても学習指導要領に準拠すべき理由でもある。

学習指導要領は文科省の管轄であり、その内容は、教員養成に関わる大学や京大教育学部など特に専門研究機関で検討すべきもので、研究者の責任は大きいと思う。実際に教育に携わるものの声を吸い上げつつも、国家百年の計として各種研修会・学会発表そして、今回の本書もその中に生かされることを願ってやまない。

教師は、教室で生徒を指導する専門家で、政治を教える公民科の教師は特にその中立性を保つことに細心の注意をしなければならない。職業倫理を遵守し、分を守って内実の完成を目指す、ある種の職人気質ともいべきあり方である。

一人ひとりの生徒を全人として見るという専門家である。「専門医をいくら増やしても医師不足は解消しない」という意味も患者を生命の全体として捉えられる医師でなければならないということであろう。ヤスパースの言わんとすることのなかにも見られる。

高校の教科書の実存主義を調べた。『地歴』科『公民』科となる前の、指導書の一文をあげ、思い出の結びとしたい。

近い将来、教師を目指す人たちに励ますお手本にしたいものである。「倫理・社会担当の教師の苦しみと喜びは、まさに人間の根源的な問いかけを、まず教師自身のものとし、先哲の思索のあとを追体験しながら、自ら思索しそれを生徒のレベルにまでおろすという作業にある。わかりやすく教えるという点において、学校の教師は技術者という面を持つ。教師自身の学習の深さは、大学教授以上でなければならず、教えるという点では有能な技術者でなければならぬ。しかも、よりよく生きることを常に求める求道者として、生徒に対しては模範的な実践家でなければならぬ。……授業に対するパッションの有無は、キャリアや年齢をこえたものがある。若い先生がたは、ものおじせずとつくんでほしい。最低で、しかも最高の教師の要素は、学問研究に対する真摯な態度を持続することである。」(改訂倫理・社会 東京書籍 P21)

教科書の執筆者のお一人の弁で、続けて「今こそ心の豊かさを求めるときである。われわれ教師は、21世紀に向け、次代を背負う若者の教育に専心したいものである。」(同 P24) との励ましで結ばれている。

「教師自身の学習の深さは、大学教授以上でなければならず」は努力量であるにしても、国家国民のためにリーダーシップを発揮するエリート教育を視野に入れたものではないかと思う。公民科に現代社会が編成される前のことである。

2. 京都学派のこと

吉村先生の恩師は教育人間学の創始者、京都大学教育学部の下程勇吉先生、そして後任の上田閑照先生のお二人である。ともに西田門下と聞く。以前、吉村教授の訳書キェンメル著『倫理と対話－道徳教育の人間学的探求－』に何度か挑戦し、また『学び住むものとしての人間』を読んだものとして、先生の学風、すなわち精確な訳や丁寧な論理展開やそこに散見される上田 (P20,199,215,221,231) 西谷 (P168,206,233) 西田 (P199) といった人物名から、先生の思索は西田哲学につながるものだと感じていた。

『学び住むものとしての人間』に続く本書では教育人間学の源であるお二人の恩師である西田・田辺氏と京都学派についても明らかにされるものと期待していた⁽⁴⁾。というのも、小生の京都学派への関心は、小生が初めて勤めた学校の校長が西田先生に習ったという方であり、教育を<生徒の魂の平安>と考えていたこと、そして私の恩師のひとりに田辺門下で田辺先生と晩年まで多くの書簡を交わしていた安藤孝行教授がいるからである。存命なら100歳になる今年、特に京都学派の中でどのような位置を占めていた方なのか知りたいという思いが強くなったからである。

ちなみに、近年京都学派は『西田幾多郎と田辺元に直接指導を受けた者が中心となって形成した一時代の哲学思潮』として、ドイツ語訳等海外評価も手伝い再評価されていると聞く。

3. 『ヤスパース 人間存在の哲学』 を読んで

40年前社会科教員になった日から、小生にも「教育と研究」の意識はあったが、中高で教員をしているなかでは、学者の研究成果に触れ、取り入れることはあっても、自ら研究するということはほとんど出来なかった。ことに500ページを超える本書に触れて、研究し、学問として発表するということの厳しさをあらためて痛感した。

本書は、ヤスパースの思想を「人間存在の哲学」として解釈しようとする試みである。テイリツヒに始まり、ラバネスまで、50人を超える思想家や研究者をとり挙げている。これら本人の言葉とヤスパース自身の言葉(著者の訳文で)の引用は当然であるが、可能な限り議論そのものも本人に語らせるように構成されている。自然にすんなりと読めるのはそのためでもあろう。説得力があるのは一切議論を端折ることなく(順次後で取り上げられると

いう意味で)されるからであり、読み進めば体系的に論証されていく安心感がある。

後で少し引用するが、本文を10ページに要約した序はありがたい。

では、ティンマーマンもいう『忘れられた哲学者』に少し触れよう。私には高校倫理で親しいので、意外の感があったが⁽⁵⁾・・・。

ヤスパースは1883年ドイツのオルデンプルクに銀行家の父のもとに生まれた。はじめ法学を学ぶが、ベルリン、ゲッティンゲン、ハイデルベルクの各大学で医学を学び、1910年ハイデルベルク大学の精神科医局に勤務、13年『精神病理学総論』を著し、精神病理学者としての地位を確立した。この間マックス・ウェーバーと親交を結ぶ。16年ハイデルベルク大学で心理学担当の教授となって『世界観の心理学』(1919)を発表する。21年には哲学教授となり、10年の沈黙期間ののち、『現代の精神的状況』に続いて三巻からなる主著『哲学』を公表。実存哲学者として有名になる。

本書を読了して、大学は研究機関であるというかつての思いや記憶が衝撃的によみがえった。

体験学習について触れたが、いやしくも教育するとは、その体験の前提に根本知の二重の意味を理解しなければならないし(P139)、一口に体験といっても「現存在経験」のほか、暗号を読み解く「形而上的経験」(P398)もあるし、そもそも「より実践的」か「より観想的か」を相対化するのが永遠の哲学であることを知る。したがって、教科教育には教育人間学が必要であり、教育人間学には、その基礎に哲学が、それも永遠の哲学としての形而上学というすべての存在者(世界)の根拠を問う学問が必要であることがわかった。

ちなみに形而上学は限定された知識ではなく、普遍的、全体的な知識を求める。これは特殊科学の知識でもなければ、科学を成り立たせる単に主観的な根拠の知識でもない。それはすべての存在者を根拠づける知識である。したがって、特定の領域を越えた超越的知識でもある。形而上学は存在を存在として扱う学でもある⁽⁶⁾。

さらに本書では、ヤスパースの『哲学』のあとがきや『自伝』からも、彼の哲学の意図が、実存だけを問題にするのではなく、古来からの理念に従って、世界・実存【魂】・超越者【神】を包括的に捉えるものであることが知られる。

上述のように、著者はヤスパースの哲学を「人間存在の哲学」ととらえるとともに、その哲学は科学主義、人間中心主義の現代の根本的趨勢を破り開き、人間を人間であらしめる可能性を有しているという。

ヤスパースにとって哲学することの永遠の課題は、超越者との関わりにおいて人間が本来の人間になること、究極的には自己になることであるという。

序文に従いヤスパース哲学の基本的特徴をあげれば、ヤスパース哲学は科学主義の人間中心主義を批判するとともに、〈永遠の哲学〉としてケルケゴールの〈啓示信仰〉からもニーチェの〈無神〉からも区別される。科学的に確かめられた客観的事実がどれほど豊富であっても、対象的にとらえるということにおいて、それ自体では人間に根本のところでは存在に意味や目的を与えるものでないことが語られる。生命についても「自然における生きたものはただ生命からだけつくられる」(P2)として生命そのものが物質から生み出されうるといふ生命科学の立場を否定する。

彼の『哲学』は、実存(魂)だけを問題にするのではなく、世界と超越者(神)をも、包括的に問うもので、彼ははじめから単なる実存主義者ではない。

対象としてとらえるのではなく包越ということ、引いては超越者までにいたることが求められ、これがカント哲学につながる⁽⁷⁾。

ただ注意したいことは、著者は、ヤスパースを一貫したものとして理解しようとしており、「実存哲学から包越

者の哲学に立場を移したのではない」(P72) という。

4. カント理解に関して

ヤスパースは超越することにカント哲学の核心のひとつをみる。本書のもっとも重要な論点で、ヤスパースのカント解釈を含め(P121) これは、章をまたぎ述べられている。超越ということである。特に注目すべきは、カントの認識論でいうコペルニクス的転回といわれるものである。主観によって構成される外部のものは、現象として五感を刺激するがそのもの自体は知ることはできないとする不可知論になる⁽⁸⁾。そのため、カントの信仰心という実践的要求にもかかわらず形而上学を否定する思潮を形成してしまったが、本書ではまさに、その対象化、概念化せざるを得ない人間の認識方法が問われるのであり、もの自体への因果性(P 147) 超越性が(P 169) 問われるのである。

「カントはすべての対象性の条件を示そうとしているが、しかしそのことはただ対象的思惟においてのみ、従ってそれ自身対象であることを許されない対象においてだけ可能である⁽⁹⁾。」(P12 1)

また、実存は贈られてあり、(P 351) 超越者そのものは隠されていて現れず、(P 418) 「対象がそれとして成立するための条件をどうしても対象化せざるをえないというこのディレンマあるいは根本的困難は『……そもそも対象的には解決されず、ただ超越することにおいてのみ解決されるだけである……。対象化するものである概念をもって、しかし対象として固定するのでなく対象性を超越してゆくこと』 -これがヤスパースによればカントが欲していることである。従って、カントにあって重要な『アプリアリ、統覚の超越論的統一等々などのあるものについての定義しうる固定的な概念とすること』はカントを誤解することであり、それらの概念はただ機能であって、認識でなく、しるし(Marke)であって対象でない。』」のであるが、著者吉村先生は別の立場としてヤスパースに反して超越することを放棄する2つのカント解釈をあげる。「心理学的-人間学的」な理解と「方法的-認識論的」理解であり、ともに循環に陥るといふ⁽¹⁰⁾。(P 122)

この超越は他に、イエスや福音書の暗号、ブルトマン批判や、暗号の三種の検討、仏教解釈にも見られる共通する考え方である。

次に吉村先生の共著『ランゲフェルト教育学との対話「子どもの人間学」への応答』のなかで西谷啓治を引用しヤスパースを要約された言葉があるのでその文を挙げよう。(p 176)

すなわちニーチェの「神は死んだ」以後の有力な二つの思潮、マルクス主義と無神論的実存主義をあげ、それらが「神による『予定』の必然性を世界や魂から排除することによって現実存在において『人間』を回復しようとする」新しいヒューマニズムと捉えて、両者とも「根本に大きな空白を残している。その最もあらわな証拠は、それらが生死の問題に答え得る場を含まないということである。その問題は、人間の立場が絶対に超えられることを要求する」(西谷)

そして「神を否定する、ということは神を自らの前に立てる我を否定するところの『空』において人間はその『自力』によるのではなく、人間を絶対的に超えたところにおいて人間としてあるということである。神は死んだと神を否定することが、それを表象する人間の否定=無我にまで徹底されないなら、神を否定した無神論はその我を引きずって神を代理するものを立てることになる。ヤスパースの指摘しているのはそういうことであろう。」(吉村)

5. 本書の構成と論理展開の特徴

衝撃を持った第二の事は、この書が純粋なヤスパース研究の哲学書であることと、アカデミックとはいかなることか教えられたことである。

最近、『大漁』と題する何百という大羽いわしを描いた細密画を目にする機会があった。同じように見えるが、一匹一匹それぞれ異なっており、それらが大群をなして動いている一瞬をとらえたものである。ちょうど森が多く、樹種から成り、その一本一本の木が一枚一枚同じような葉をつけていながら、生えている位置が異なることで、木としての生命を維持する一端を担い、森を形成する有機的なつながりとなっている様子に似ている。

本書の構成は、まさにそのようなものであった。すなわちヤスパースの思想を500頁にわたって細分化し、哲学的立場からその位置関係とその繋がりを明確にした芸術作品ともいべき精密さである。本書の、実に約半世紀に及ぶ構想期間が、この精密な構成を可能にしたのであろう。

ヤスパースの哲学を「人間存在の哲学」として解釈することについて、第一章 ヤスパース哲学の基本的特徴、第二章 包越者の哲学、第三章 超越すること が計二七節 158 ページにわたり跡付けに費やされる。

第四章 人間存在－意識的な精神の現存在、第五章 人間存在－その超越的あり方としての実存、第六章 限界状況、第七章 超越者、第八章 暗号 (1) －その基本的性格、第九章 暗号 (2) －暗号の三つの言葉、第十章 交わり の計七章 341 ページが「人間存在」の開明に充てられている、

本書の随所に「すでに明らかにしたように」の確認のまとめがあり「またこの点をより詳細に見てみよう」と、より緻密な議論の深まりに導かれる。その展開に「かくして」が要約としてはいい、「ところで」「ところが」では主要な反論とその可能性を子細に検討もし「このように」「以上」とまとめられ、これらが全体として繰り返されるといったもので学問として何事かを発言するとはかくも強靱な意志と精確な記憶力とを要することに驚かされる。

著者はいう「哲学することは人間の変革を意味する。すなわち人間の意識の根本状態である主観－客観－裂開を超越していくことにおける人間意識の根本的な転換である。包越者は個々の限定された存在する者を越え包む本来の存在そのものであるが、包越者論ないし包越者の哲学はそうした人間の変革によって、主観－客観－裂開における対象的な存在への呪縛から解放され、対象の限定を越えた包越的な世界において包越的存在として自らを見出す人間存在の哲学である。すなわち包越者の哲学とは客観を<世界>とし、そこにおいてある人間自身を同じようにして<客観>へと閉ざす科学主義をも<人間中心>として打破されるべきものとしてとらえるものである。包越者の包越者としての超越者との関わりにおいてのみ自己存在としての実存になる。」これがヤスパースの立場であるとする。

学問的とはこのような厳密さを要求されるものだと言うことであらう。

また、カントの4つの根本的問いを取り上げる中でヤスパースが「私には五つの根本的な問いが生じてきた。つまり科学への問い、交わりと真理への問い、人間と超越者への問いである。」を取り上げるについても、吉村教授は、「ここで言われている個々の問いのより詳細な内容とそれらのカントの問いに対する関わりは当面の問題ではないので、それに関しては省略し、ここでの問題に関わる一点に絞って注意しておきたい。…人間が単独で捉えられるのではなく超越者と結びついているということである。そしてこの点に関してヤスパースは次のように言う。」その後、実存哲学という人間中心をハイネマンやザナーを取り上げながら、ヤスパース自身の『現代の精神的状況』から教授は反証する。

ヤスパースは上述から知られるように医学から哲学に進んだ人で、いわゆる科学者の知見を持った人である、だ

からこそというべきか、ヤスパースの科学観の批判も本書の中にはあるし、している。

また、当面の問題で省略されたものも、後にはすべて俎上にあがり、本書の各所にその大切な部分として組み込まれるのである。

6. 冒頭の言葉と限界状況について

著者は「存在とは何か」という問いに答えようとすれば、思惟するわれわれ（主観）と思惟される対象（客観）への分裂が生じ、さらに思惟された当の対象が他の諸対象から区別されるという対象における分裂という二重の分裂が生じるという。

また「超越することによって私の意識の態度が別なものになる、つまり……私の態度を……変える衝撃が私の中で起こるのである。より具体的にいえば超越することは、すべての現存在が現象であるという性格をもつという意識に転化する。」(P123 f)

限界状況を取り上げた第六章の1節には「一般的な死」と「私の死」がある。他の書物との比較を含め、先生の丁寧な論理展開を見ていただく意味で、以下まことに小さな一部分ではあるが、出来る限り要約を避けて、著者の文に直接ふれていただく。

「死は生命的存在・生物に必然的にともなう<客観的事実 (objectiives Faktum)>である。われわれ人間も生物である限り、ヤスパース的に言えば生きた包越的現存在である限り、この客観的事実をまぬかれ得ない。ただ人間は、他の生物とは違って自らの死を知っている。しかしそのように知られた死は人間一般に妥当する<一般的な死 (allgemeiner Tod)>である。だが、「死についてのわれわれの一般的な知と死に対するわれわれの体験された関わりは異質である。」(p w 261) 客観的事実として知られた一般的な死に対して「それぞれの自己の個別的な死」(ibid.)は「人間のそれぞれの自己の死に対する他と比べられえない関わり」(ibid.)において異質である。前者において死は限界状況でなく、後者において死は限界状況となる。

こうして、客観的事実として一般的な死でなく、個別的な死である<私の死>こそが限界状況としての死であるが、『哲学』においては、私の死だけでなく、<最も近い人と私の死という限られた死> (ph II 221) が限界状況としての死だとされ、その点で『世界観の心理学』と違っている。最も近い人の死が、私の死と並んで限界状況とされるところには、実存が他の実存との交わりにおいてのみ実存となりうるとする『哲学』における実存の<交わり>の強調が窺えるであろう註①。しかし、もっとも近い人が私にとってかけがえのない人である場合、その人に死は確かに限界状況となるが、「決定的な限界状況は依然として、このまったく客観的でなく、一般的に知られない、唯一つの死としての私の死である。」(ibid.222)。註①を次に挙げる。

「私が交わるもっとも近い人の死はもっとも深い切断で、死に行くものも残るものも一人にされるといふ深い孤独が支配する。かつて存在した人が現実失われていることには、現存在する人間には慰めのないことである。しかしその死を客観的事実としてではなく、実存的震撼と受け止めるなら、実存は「その死によって超越者において護られ、死によって壊されるのは現象のみであって、存在そのものではない。」とある。そのときには、本書で唯一触れられなかったヤスパース哲学の「世界が言いえぬほど美しくなる」ということに繋がるという。すなわち、交わりが欠ける絶対的孤独と近い人の死による孤独は異なるとヤスパースは言い、残された人の解消されない痛みの上に、より深い晴朗が可能であるという。ヤスパースの仏教理解特に〈空〉に対する、西谷啓治を挙げての批判や、挫折の暗号に対するリクルへの批判、すなわち哲学的信仰と啓示信仰の出会いの可能性につながるものである。

おわりに

実存とは何か、本書ではハイデッガー⁽¹¹⁾・ニーチェ⁽¹²⁾・キェルケゴール⁽¹³⁾との異同の記述が限界状況のなかでも述べられ、カント⁽¹⁴⁾を除いては最も詳しい。それ以外では、神話としての暗号のリクル。同じく暗号の中の芸術ではアイスキュロス・ミケランジェロ・レンブラント・シェイクスピアそしてゴッホ・ゲーテに触れている。通低音の超越者。アシジのフランシス・アウグスティヌス・プロチノス・ヨブ・モーセ・パスカル・ブーバー・ブルトマン・エックハルト。高坂正顕にもあるヤスパースの仏教理解への批判も詳しい。

今改めて目次を見直すと、完璧な哲学研究書の体をなしながら、人間教育に関する前書にも増して教育基礎学書であることが理解できる。索引がないのも、部分的に、人間の問題にも対処しようとする自分への戒めと思える。

そして教育も、京都学派の上田閑照氏が科学の方法論上の制限を自覚できないある脳神経科学者を批判して「ここらという言葉で人間が自覚してきたことは、脳のことをまったく知らなくても、知らないことが、なんら不足にならない形で、まして脳の科学という知識なしに、人間を深く人間として規定し形成してきた」(p2) という、人を全体としてとらえることにつながる。人間の相対性を深く、自覚させられる書でもある。

先生のご健康を祈念し、あとがきにある研究計画の進展、公刊に期す。2011年9月

注

- 1 芸術・哲学も加わった20分間に、生死を貫く<死生一如>人間観の涵養も目指されていたように思う。
結論を先取りすれば、公教育として、礼拝の担当者は教義すなわち「神が愛から人間になり、罪に沈む人間に代わり自らを犠牲にして十字架にかかって死ぬ、という神キリストの行為を信ずることによってだけ人間は義とされる (P412f)」を直接話すことはほとんどなく、私などは違い担当者の多くはヤスパースに近く、イエスに<真実な人間の挫折>を見、モーセのシナイ山における啓示は<暗号としての啓示>であり、そのことによってより<根本的有限性と不完全性を自覚>させるとともに、より純粹により真実になるという<善き意志、正直さ、誠実さへの無条件な決意>を示唆し<良心の声> (当為)において<私を包越するものつまり私自身を超えたもの>を感得させようとする P415ff の<哲学的信仰>に至る実存的話をされていたように思う。ちなみに本書で他に気づかされたことがある。礼拝で植物の話のみされる方がいた。それがここでいう<暗号> (ヤスパースは記号・シンボル・暗号を区別する P382 f) を前提されたものであるならば、その話は教務教師として公教育を担う立場から、学校の宗教教育に必要な一つの配慮だったと言えるかもしれない。
- 2 これは、本書 P113 でいう、カントの認識論のカテゴリーの概念形成の内容となるものであろう。
- 3 知的な優秀性には、<芸術・技術に関する、表現や制作を伴うもの>、<数学に関するもの>、<人とのコミュニケーションの TPO に関するもの>、<超越的对象にかかわる宗教的観想>などがある。
- 4 ヤスパースも絶対無をいう。京都学派の高坂正顕、西谷啓治の批判 (p360f) とハイデッガーのヤスパース解釈としての無については西谷啓治の批判と後期ハイデッガーの<存在と無の相属>を確認した上田閑照 (P313ff) 氏の見解にも触れるが、著者はこの思想を含め、ヤスパース哲学と西田哲学や田辺哲学との比較検討にはさらに別の一書が必要という。(p364ff)
- 5 本書の序でも触れられているが、高校倫理の多くの教科書では、実存主義のくくりを、<有神論>と<無神論>に二分し、前者に、キェルケゴールとヤスパース、後者に、ニーチェとハイデッガーを配していた。まれに前者にマルセルが加わり、時々後者にサルトルが入る。ちなみに、授業は六人の哲学者全員を含めても全体で4単位時間 (大学の2コマ) が平均的時間であった。

- 6 P99にあるとおり<形而上学>と一言で言っても、その概念は一義的ではない。安藤孝行著『形而上学』勁草書房にも詳しい。
- 7 本書の順序としては、純粹理性批判を要約した上で理念論に入る。「カントの『純粹悟性概念(カテゴリー)の超越論的演繹』が『事実問題』としてではなく『権利問題』として重要になる」としてP102以下<対象の触発・構想力・常住不変の自己(意識)>が語られ、次に<構想力>と<超越論的統覚>との複雑な関係を表象の連想の根拠としての<超越論的親和性>に求め、構想力が統覚の統一の根拠を持つことが明示される。
- そして現象である表象が対象として成立するために必要なのは、われわれの思惟の判断という論理的働きを規定するカテゴリーであるという。
- 以上著者はヤスパースがカントで重視するカテゴリーの超越論的演繹を述べて、その論拠を「その点は、『純粹理性批判』の第二版ではほぼ全面にわたって書き改められた<純粹悟性概念の演繹>の章が<私が思惟する>という根源的統覚でもって始められていることによって、一層明確にされるのである。」とする。
- 8 この解決すなわち物自体と現象界の二律背反がP146にみられる。
- 9 勤務校の例になるが自己反省として、超越者を時間空間のイメージとして对象的に考えてよいのであろうか。P130にある哲学的根本作業との異同の問題である。歴史上現れたもののみ客観的実在性を持つということであろう。(P 113) ちなみに礼拝の講堂は天井が高く、前方左右の壁には、永遠を思わせようとしたのか、暗号の第二の言葉(P 420)としての芸術的な幾何学模様の蔓茶羅風なものがあった。設計者は建物が人を作る(教育する)との信念と、啓示信仰を持っていたという。
- この啓示信仰については、著者は「有限な感覺的存在者によって経験されるのである限り、そうした啓示を暗号とし<暗号と生きる(Das Leben mit Chiffren)>ところの哲学的信仰(der Philosophische Glaube)をヤスパースは対置する(P416f)」という。宗教教育の難しさであり、実存的自覚を促す努力が教師に求められる所以であろう。
- 10 意識的な精神の現存在についての考察は、第4章のP180以下に詳しい。
- 11 現存在についてレーバーの解釈を挙げるとともに(P162)、ヤスパースとの相互の批判を挙げ、現存在概念の違いを明らかにする。(P300)
- 12 <生成・永遠回帰・運命愛>の考察の後(P256ff)、ヤスパースはさらにそれを基礎付けるところから捉えなおす。(P267) この学究姿勢はまさに一貫して著者のものでもある。
- 13 ヤスパースの<限界状況>と<永遠の現在>がつながることが指摘される。(P255)それは、藤田健治やマルセルの<歴史的規定性(限定性)>の解釈にもつながるという(P245)。
- 14 前述の注7の後に、ヤスパースはまずカントの理念の一つである自由を自律的自由として概観する。続いてそれが実践理性において客観的実在性を得ることが述べられ(P152)他の二つの理念(靈魂の不死と神)も同様とする。すなわち、最高善の条件として、<道德性の完成>と<幸福>が、自由、神、不死という理念との関係で述べられる(P155)とともに、理念はそこでは、構成的であることができるとする。(p145) 著者は「このように、ヤスパースの場合には、実践が実存の一つであり実存は・・・われわれ人間の現実であって、それと結びついて超越者も単に実存からの要請としてではなく<隠されて>いるが実存にとっての現実である(その場合、カントの言うように超越者が<客観的実在性>をもつという点に関しては問題であり、後により詳しく検討する)。このようにヤスパースは<実践>に関してカントを忠実に引き継いでいるわけではないことは明白であるが・・・その理念のヤスパース的展開である包越者を実存の実現という実践と結びつけ、すでに見たような

人間存在の哲学を展開しているのだと解することができる。」と述べ、さらにカントを越えて、〈暗号となる思惟〉について独自の見解、研究成果を論じられる。